北海道医歌人会詠草

虎落笛

士別　竹内　幹夫

雪女出さうな夜に湯に浸かる　頬打つ雪の粒の確かさ
戸の狭き隙間より雪吹き込みて　湯に落ちて消ゆ吾の憂ひよ
雪嵐樹々も折れよと吹き募る　頂の雪上下左右に
轟々と横に流るる山吹雪　脚の芯打つ湯のありがたさ
現世とかの世を隔つ闇吹雪　天地揺るがし山何を哭く

学生の頃のはなし

滝川　村田　英俊

土砂降りをひとり避けたる軒下に口ずさみたり「悲しき雨音」
焼売が読めず生ものは扱わぬ店と思ってた学生時代
思い出は十円玉の落ちる音そんな遠距離恋愛もありき
「泣き虫の津島君だった」と言う教授　太宰治と同級なりき
「やれ」「やらぬ」先輩の無理難題に正論やめて千日手選ぶ

平和

江別　三宅　浩次

遠き地のウクライナなれども他人事と言い放つのは心苦しき
わが国は平和ぼけと言われてもぼけのままで幸いと思う
何事も変わらぬ様こそ平和との言葉の意味の深さなれと
人と人憎しみあいて武器を取り殺し合うこと無情と思う
赤松に降り積もりし雪音もなく地に落ち行きて朝日輝く

エゾムラサキ

札幌　浜島　泉

陽だまりのエゾムラサキへ風そよぐ　先を競ひてふくらみをなす
並み足と走り足とが不ぞろひに　新雪の上犬を散歩の
雪のためバスが渋りて延着す　乗り継ぐべきが未着の模様
通勤時道路が込みて渋滞す　時差通勤の対応とせり
雪の壁高くせり出しなほ降りつ　横断せむに止まり見やる

十三回忌

釧路　児玉　昌彦

「死ぬような気がする」と言い入院後、十日で逝きし義父の終焉
我慢強く長生きしたるご褒美が呆けなく寝こまずポックリの死か
やせやせて枯木のごとくありしかど拾骨の骨いまだしっかり
それぞれの過去を背負いて口喧嘩絶えざりし夫婦の長きみちのり
開かれし遺言状には「母さんを大事に、きょうだい仲良く」とあり

我が友、一の渡隆生（2）

北広島　古屋雅三知

流行たる『精霊流し』のメロディーは流るる度に貴君を偲ばす
温もりの未だに残る友の手を握りしめたる母の指かな
最後まで友は『APLA（アプラ）』を疑わず　共に語らう時を信じて
医学進み治療の術も向上す今日ならば救かりたるや
友の短歌　啓発されておもむろに我も始めぬ　二十年経て

卒業

函館　水関　清

かまくらの中より漏れるもの　ふたつ　子らの笑ひと餅焼く匂ひ
炎立ち左義長の月あぶられて　風を呼びたり　故郷の空
昨夜の雪　踏んで駆け出す雪原の　空を舞ひたる金の折り紙
カリヨンの鐘五つ鳴る　始業時　「愛と智と美」を掲げる病院
すずらんは春の音階　偶然の　時間を生きて前庭に咲く